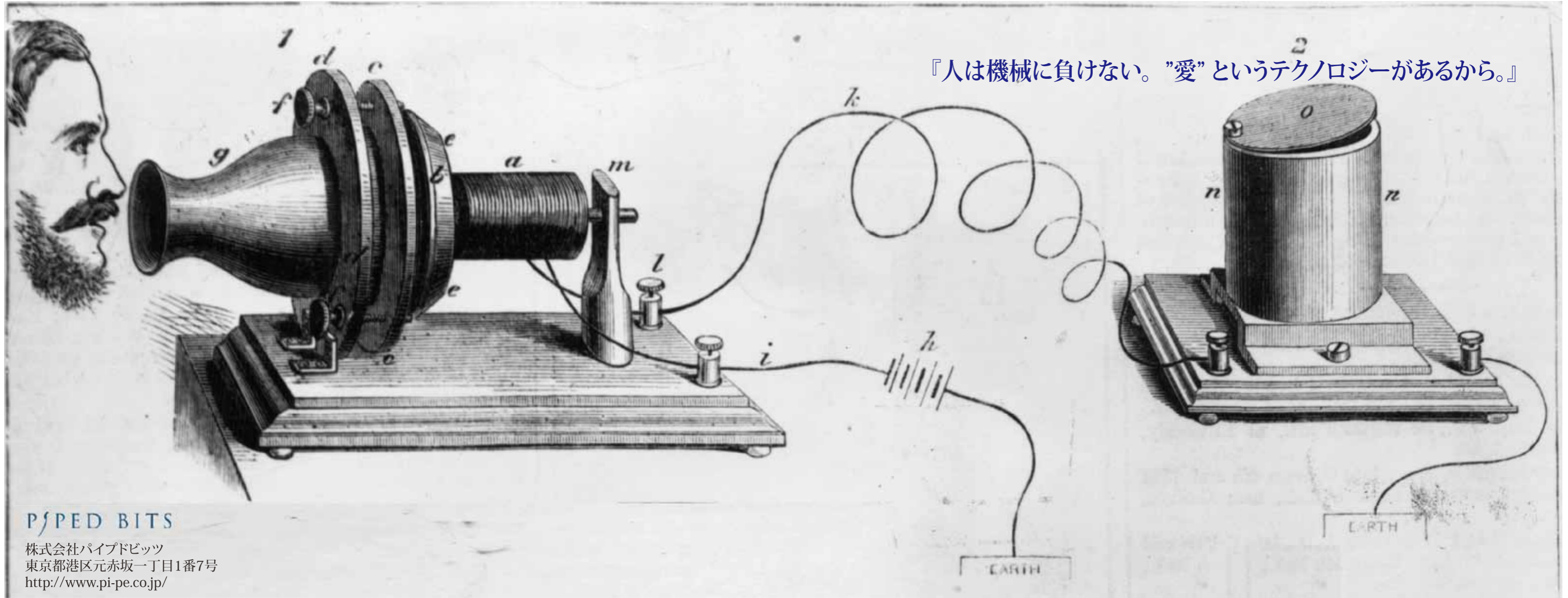


Illustration: Professor Graham Bell's telephone showing



『人は機械に負けない。“愛”というテクノロジーがあるから。』

PIPED BITS

株式会社パイプドビット
東京都港区元赤坂一丁目1番7号
<http://www.pi-pe.co.jp/>



佐谷宣昭 Nobuaki Satani
 1972年生まれ。
 九州大学工学部建築学科卒業。
 2000年九州大学大学院人間環境学研究科博士課程終了、博士（人間環境学）。
 翌月起業。株式会社パイプドビット社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など1,900余りの事業者へ情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

インターネットがもたらすもの

変化する人間と社会(1)

「パソコンは手段であつて目的ではないぞー！」。お世話になつた先生から何度も聞かされた台詞だ。Windows95が発売された頃のことである。当時学生だつた私は、先生のご指摘のとおり、パソコンの修得目的で建築や都市計画を勉強していたのだろうか。いずれにしても、大学を出た翌月にインターネットを業とする会社を立ち上げることになるのだから、手段と目的を履き違えるのも悪い事ばかりではない。

思い起こせば、当時の大学キャンパスでは、各所で学生が先生にパソコンを教える光景が繰り広げられていた。手段と目的を論じる先生には、多少のやっかみがあつたかもしれない。パソコンは先生と生徒の立場を逆転させてしまったのだから。

若い頃、野球を嗜んでいた私からすれば、先生の仰る言葉は絶対であり、自分が先輩や先生に何かを教えるなど考えられない。IT革命が叫ばれていた当時、学生はささやかな革命の現場を目の当たりにしていた。

すごい勢いでインターネット回線が張り巡らされた。パソコンが繋がった。わからないことが増える先生。得意気な学生。

インターネットが普及した。

先生は深夜に海外の研究者仲間にもメールし、翌朝に返信を受け取るようになった。論文提出が楽になり、研究成果が世界に公開されるようになった。学生は研究素材を世界中から検索するようになった。学生にとつてもはや師匠は目の前の先生だけじゃない。

インターネットの普及は師弟関係を自由にした。先生は世界に研究成果を発信し、学生は世界の先生から学ぶようになった。

私は1991年に大学に入学し、2000年までの9年間を同じキャンパスで過ごした。入学当初、学びの情報を得るのは先生と決まっていたから、学生は当たり前前に先生に権威を感じていた。

現在はどうかと言えば、政治家の不祥事、先生の不祥事、親の不祥事が報じられるようになり家庭、学校、自治の現場で、かつてあつた権威が失われているのだろう。

いくら情報生活が自由になつても、我々は親と子であり、先生と学生であり、日本国民である。いかにも不自由である。

インターネットは単純に我々を豊かにはしない。

幼い頃、昭和9年生まれの親父から聞かされた。ある日、小学校の教科書を墨で塗り、教えたことを忘れるという。小学校の教室に戦前戦後のパラダイムシフトの現場があつた。

如何なる矛盾を抱えようとも時代は進む。私は大学のキャンパスで情報化社会のパラダイムシフトを迎えた。明日の豊かな情報生活に貢献しなさいとの声が聞こえる。